

## 子どもの健全育成に関する児童館の機能価値の研究

富田久枝（児童学科・准教授）      鈴木 樹（教育学科・准教授）  
白川佳子（初等教育学科・准教授）      西島大祐（初等教育学科・講師）  
田爪宏二（子ども心理学科・准教授）      藤井佳世（教育学科・講師）  
平井悠介（児童学科・講師）      米山 弘（児童学科・教授）  
大滝世津子：旧姓（東京大学大学院／日本学術振興会特別研究員）  
望月重信（明治学院大学）      川口和英（武蔵工業大学・准教授）  
野中賢治（本学非常勤講師）

### 1. 研究目的（問題と目的）

本学では、小学校教員、幼稚園教員、保育士といった教育に携わる人材の育成を行っているが、児童福祉の新たなエキスパートとして注目される児童厚生員の育成も行っている。このような大学は日本でも有数であり、これからの人材育成やより良い教育環境について検証し提言をしていく使命を担っているとも言える。

近年、子どもを取り巻く環境は、社会の激しい変化に伴い、悪化の一途を辿っている。子育て不安や虐待といった子育て基地である家庭の機能が危ぶまれ、居場所を失った子どもたちは、引きこもり、不登校、いじめ、非行といった問題行動を引き起こし、深刻な局面を迎えている。児童館は児童福祉法第40条に基づき、子どもや家庭を支援するために作られた施設であり、子育て支援の拠点としても最近、注目を浴びている。子どもたちが健やかに成長していくために、それを温かく育む環境として、地域の核となる施設として期待されている。しかしながら、児童館はこのような地域に根ざし、子ども達の健全育成の拠点として注目されてはいるが、その社会的な機能や価値について客観的にまだ検証されていない。そこで、本研究では以下の2つの目的で研究を進めていこうと考えている。

- (1) 児童館が実際、社会でどのような役割を担い、どのような価値を生み出しているかといった機能価値について国内・海外の実態を検証し、これからの児童館の新しい方向性を模索、検討する。
- (2) 期待される社会的機能価値に貢献できる人材育成の方法や内容を提言する。

### 2. 研究計画（2年目）

- (1) アメリカにおける視察のまとめと学会における発表
- (2) 国内における実態調査とそのまとめ  
アンケートの作成及び実施

### 3. 研究の結果と考察

- (1) 研究会の開催およびアンケート調査の実施

本研究グループは、月1回を目安に本学内において研究会を開催し、研究計画の推進に努めている。今年度はアンケートの項目の検討、アンケートの印刷、配布、回収といった作業を中心に研究会を運営した。

アンケートの送付先は小型児童館を中心に約1700件送付し、現在回収、データ整理中であ

る。アンケートは53項目からなり4～1の選択肢（4件法）である。なお、アンケートの項目は表1に示す通りである。

表1 アンケートの項目の構成（全53項目）

1. 児童館の概要について（11項目）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・名称、所在地、開設年、設置運営主体（公設公営・公設民営、民営）、</li> <li>・施設の規模（屋内、屋外、収容可能人数、子どもの遊戯室等の数</li> <li>・隣接・併設する施設（公園、公民館、小学校、中学校、幼稚園、保育所）</li> <li>・運営時間（平日、休日）</li> <li>・事業対象（乳児、幼児、小学生、中学生、高校生、成人、高齢者）</li> <li>・子どもに対応しているスタッフ数、ボランティアの受け入れ</li> <li>・主な利用者の居住地域（徒歩、自転車、自動車や電車）</li> </ul>	
2. 運営の目的について（16項目）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・表現力や創造力を高める</li> <li>・屋外活動による心身の健康</li> <li>・自然体験</li> <li>・地域及び住民との交流</li> <li>・子育てのネットワーキング</li> <li>・放課後児童対策</li> <li>・障害者への対応</li> <li>・子ども参加型運営</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・体力の増進</li> <li>・自主性を伸ばす</li> <li>・社会性やコミュニケーション力</li> <li>・地域文化の伝承</li> <li>・子育て相談機能</li> <li>・中学・高校生への対応</li> <li>・クラブサークル活動</li> <li>・講座やワークショップ</li> </ul>
2. 施設設備について（12項目）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・工作・製作場所と用具</li> <li>・自然体験遊具や環境</li> <li>・運動・スポーツ施設</li> <li>・表現設備（舞台等）</li> <li>・乳幼児・保護者スペース</li> <li>・安全性への配慮（遊具）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・気分開放部分</li> <li>・動物、生き物との触れ合い</li> <li>・冒険遊び施設や環境</li> <li>・科学的な体験設備</li> <li>・母親交流スペース</li> <li>・図書館等情報提供</li> </ul>
4. 利用者のニーズについて（11項目）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・安全な遊び場</li> <li>・保護者同伴行事・イベント</li> <li>・放課後児童対策</li> <li>・親子交流の場</li> <li>・子育てネットワーキング</li> <li>・問題をもつ子どもへの対応</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どものための行事・イベント</li> <li>・地域全体の行事・イベント</li> <li>・専門知識を持った人材への要望</li> <li>・地域社会との交流の場</li> <li>・子育て相談</li> </ul>
5. 自由記述項目（3項目）	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・子どもの遊びや対人関係</li> <li>・子どもや保護者、地域に果たす役割</li> <li>・特色ある取り組み（独自の取り組み）</li> </ul>	

## (2) 学会における研究成果の発表

今年度は5月に開催された日本保育学会において、昨年度実施したアメリカの視察研修の成果について白川・西島・富田の3名で口頭発表を行い、参加者の方々から貴重なご意見を頂くことができた。以下に、発表の概要を示す。

### <アメリカのチルドレンズ・ミュージアム等の教育施設の視察報告(1)>

—施設スタッフへのインタビューやプログラム活動の観察を通して—報告者：白川佳子・西島大祐・富田久枝

#### ① ポストンC.M.

ポストンのチルドレンズ・ミュージアムは歴史が古い施設で、2007年4月に大規模な改装が行われた。建物は三階建てになっており、1階のロビーを入ると3階まで吹き抜けの昇降遊具(Climb)の他、運動遊び(Kid Power)、科学遊び(Science Playground)、体験型ミュージカル(KidStage)、2階には水の遊び(Boats Afloat)、常識学習(The Common)、物語遊び(Arthur & Friends)、音楽遊び(Airplay & Blue Man Group)や3歳までの親子の遊び場(PlaySpace)があり、3階には黒人の生活(Boston Black)、構成遊び(Construction Zone)や日本の文化紹介(Japanese House)があった。

施設のターゲットは0歳から10歳の子どもであり、スタッフは月に1回程度研修を行っている。基本的にスタッフは子どもたちの遊びを見守る立場にあるように感じた。スタッフが子どもたちと積極的に関わっている場面は、KidStageにおけるミュージカル「3匹のこぶた」と3歳以下の親子の遊び場であるPlaySpaceでの描画コーナーであった。チルドレンズ・ミュージアムの中でも特に規模が大きいポストンC.M.の特徴は、4歳以上の子どもたちに対しては体験型の遊具で自主的に遊ぶ環境を用意し、3歳以下の親子については親子が落ち着いて過ごしながらか関係を促進するような遊具を用意し、限られた時間帯だけはスタッフが用意したプログラムで親子と一緒に遊ぶシステムになっている。

#### ② マンハッタンC.M.

マンハッタンC.M.は市の中心部にあり、地下1階から地上4階までのレンガ作りの建物である。地下1階には、積み木コーナー(5歳以上対象)、地上1階には、ギリシャ神話の展示(6歳以上)、2階には探索コーナー(2~6歳)、3階には遊びコーナーと4歳以下の教室、4階には5歳以上の教室があった。マンハッタンC.M.ではニューヨークの大学と共同で遊具の開発や子どもの発達について研究をしており、それらを施設の中に生かしているとのことであった。スタッフの中にはエドゥケーターと呼ばれる先生役の人たちが、子どもたちに関わっていた。特に、お絵描きコーナーでは、参加の子どもたちにエプロンをつけたり、キャンパスの準備など遊びの環境を整えるなどをエドゥケーターが常時対応していた。また、展示されている遊具は文字習得や物の属性などの知育系のものが多く、保護者向けにどのように子どもに関わったらよいかについてのインストラクションが表示されていた。

#### ③ ブルックリンC.M.

ブルックリンC.M.は黒人が多く居住するブルックリン地区にあり、チルドレンズ・ミュージアムの中では小規模な平屋建てになっている。2008年2月頃に改装が完了する予定で、このミュージアムの特徴は、平屋の中に階段状の傾斜があり、それぞれのコーナーをトンネルで繋げている。そして、ピザ屋さんごっこコーナー、ステージコーナー、生物の展示

コーナー、植物コーナーなどがあり、毎日のプログラムがお昼から夕方5時頃まで5歳未満と5歳以上にわけて用意されており、それぞれのプログラムに担当のエducatorが決められていた。Educatorの方にインタビューしたところ、月ごとに毎日のプログラムを計画しており、参加する子どもたちは近所の子どもたちが多く、毎日通ってくる子どもたちもいるとのことであった。両親が共働きのため一人で過ごさなければならない子どもたちの安全な遊び場となっており地域のニーズにあった施設であると感じた。

#### <アメリカのチルドレンズ・ミュージアム等の教育施設の視察報告(2)>

一冒険遊びの視点から見た日米比較の検討を通して一報告者：西島大祐・白川佳子・富田久枝

##### ① ポストンC.M.

運動遊び(**Kids Power**)のコーナーでは“**Power Launch**”のような身体を使って物を引いたり動かしたりするような遊具や、“**Rock the Power**”のように子どもが楽しむためのクライミング・ウォールなどの遊具があった。特に“**Rock the Power**”ではクライミング用のヘルメットが常備されているなど、本格的なクライミングを体感できるようになっていた。身体を大きく使って物をよじ登るような遊具が多く目立つコーナーであった。この施設には子どもの冒険心を掻き立てるような遊具が多くあったが、冒険遊びや冒険教育といったようなコンセプトを特別持っているというわけではないということだった。

##### ② マンハッタンC.M.

大きさ、長さ、形、上下などの概念、言葉などを学べるような知育系の遊具が中心に置かれている施設であった。あまり冒険遊びといったテーマの遊具や活動は見られる施設ではなかったが、**Dora**というキャラクターが探検をするといったテーマの展示が見られた。

##### ③ ブルックリンC.M.

黒人街の中に位置する、地域密着型の施設である。動植物に触れるプログラムなどは豊富で、子どもの自然に対する好奇心を高めるような活動が多く見られた。

##### ④ セントラル・パーク内レクリエーション・センター (**North Meadow Recreation Center**)

このレクリエーション・センターにはアドベンチャー・プログラム施設があり、その他にもテニスコート、バスケットコート、創作室などがある。セントラル・パークのアドベンチャー・プログラムでは子どもの問題解決能力や適応能力、リーダーシップ能力などを高めることを目的とした冒険的教育活動が展開されている。アドベンチャー・プログラム施設には室内外のクライミング・ウォールが設置されており、8歳~17歳を対象として週1回の解放日と週2回のクライミング指導日がある。

#### 4. まとめ

アメリカの教育施設には子ども向けのクライミング施設が日本よりも普及されており、充実していると感じた。日本においてもそのような施設が充実されてくることで、子どもの冒険遊びが深まるきっかけになるのではないだろうか。また、冒険遊びを考える際に、**Outward Bound School**や**Project Adventure**などが行う冒険教育とのコンセプトを比較検討する必要があるだろう。今後は今回の視察結果をさらに深く検討することによって、日米の冒険遊びや冒険教育に対する比較検討を進め、様々な教育施設における機能価値について研究を深めていきたい。